

明治期の高島亀太郎

川 東 蛸 弘

目 次

はじめに

- 1 小学校時代の亀太郎
 - 2 実業家・亀太郎
 - 3 独学，努力の人・亀太郎
 - 4 実業青年会のこと
 - 5 政治家・亀太郎
 - 6 華宵について
 - 7 クリスチャン・亀太郎
 - 8 文化人・亀太郎
- おわりに 一人間・亀太郎—

は じ め に

高島亀太郎（1883年2月6日～1972年9月23日）は、明治・大正・昭和の三代にわたって、宇和島地方を中心に活躍した、優れた実業家であり、政治家であり、文化人である。また挿絵画家高島華宵の兄でもある。

その亀太郎が、生涯にわたって、自分がかかわり、受け取った資料類や手紙等を捨てることなく、大切に保存していた。また、自分の資料だけでなく、父の和三郎や祖父の英三、また妻、兄弟、そして子供達の資料も大切に保存・保管していた。これらの資料類は家業の生糸商・製糸業関係のもの、商工会関係（実業青年会、商工会、商工会議所等）のもの、政治関係（町会、市会、県会、衆議院議員等）のもの、亀太郎宛の書簡、亀太郎の日記、俳句・趣味関係のも

の、教科書類など、多種多様、多岐にわたっていた。そして、これらの資料は、亀太郎の孫夫婦（高島重章・澄江夫妻）から、1994年（平成6）12月、松山大学に寄託されたが、資料は実に29,599点にのぼっていた。この資料は、大学で分類・整理が行われ、「高島亀太郎文庫 資料目録」（1996年）としてまとめられている。

これらの資料はどれも貴重だが、なかでも亀太郎の書き残した日記が第一級の歴史的価値のある資料であった。

日記は、亀太郎が高等小学校を卒業する直前の明治30年（1897）1月から、亡くなる直前の昭和47年（1972）7月まで、途中抜けている月日もあるが、ほぼ毎日のように書かれていた。年齢は13歳から89歳にかけてである。実に76年間に及んでいた（ただし、残念なことに、散逸のため現存分は56年間）。原敬日記が46年間だから、著名な政治家の日記としてはトップクラスに入るであろう。

日記の分量は勿論であるが、何よりも内容に価値がある。日記には、気候のこと、自分のこと、父和三郎のこと、弟華宵のこと、妻・家族・親類のこと、友人のことは勿論、家業のこと（生糸商・製糸業等）、政治活動のこと（町政・市政・県政・国政等）、選挙活動のこと、実業青年会活動のこと、キリスト教や俳句活動のこと、同窓会のこと、病気・疫病・葬儀のこと、戦争のこと、宇和島空襲のこと、旅行のこと、また、いわゆる官官接待のことなど、数多くのことが記されている。特に県会、市会などの記述では、政界の裏の生々しい記述も見られる。つまり、亀太郎日記は当時の政治・経済・社会・文化・自然のすべてにわたり、まさに生きた政治・経済・社会史となっている。また、亀太郎は漢文の素養があり、文章能力、表現能力、観察力、洞察力も優れていて、ぐいぐいと読ませる内容となっている。

日記を読むと、亀太郎の生涯は、一庶民の懸命な努力と生きざま、立身出世のひとつの物語を見るようである。本論文では、この高島亀太郎のその波瀾にみち、多岐にわたる生涯について、日記を見ながら、考察することにする。

1 小学校時代の亀太郎

亀太郎は、松方デフレ下の真っ只中、明治16年(1883)2月6日に、愛媛県北宇和郡宇和島町裡町4丁目(現宇和島市)に、父和三郎、母千代の8人兄弟の長男として生まれた。父和三郎は小間物商と生糸商を営む商人で、正直者・働き者であった。父は道楽肌の祖父(英三)が傾けた家を建て直した。生活は富裕ではないが、衣食に困るようなことはなく、中位であったようだ。明治10年代の宇和島町を見ると、町全体がまだ封建時代の延長・旧態依然たる状態であって、積極進取の気風に欠け、徳川260年の因習から脱皮しえていなかった。父は教育には理解なく、商家の子供には学問は要らないという封建的観念が強く、そのなかで亀太郎は育てられた¹⁾

亀太郎は、大日本帝国憲法が公布された年の、明治22年6月に、町立宇和島尋常小学校に入学する。新入児童は200人、生徒は能力により甲乙丙丁の四組に分けられた。尋常小学校時代の亀太郎は、おとなしく、気が弱かったとのことだが、勉強は大変良くでき、記憶力も抜群であった。亀太郎は26年3月、尋常小学校を首席で卒業し、卒業式には生徒総代として答辞を読んでいる²⁾

亀太郎は、日清戦争の前年、明治26年4月、町立宇和島高等小学校に進学する。当時の義務教育は尋常小学校4ヶ年だけであり、農家の子弟などは4年間でやめていくのも多かったが、亀太郎はさらに進学した。高等小学校は宇和島町にあっただけで、北宇和郡内の近隣町村にはなく、周辺の町村の子弟は宇和島町の縁故の家の下宿して通学していた。生徒は比較的インテリ層の旧士族の子弟が多く、亀太郎は同級生や年長者との交わりの中で、人格を形成し、品性を陶冶した。高等小学校時代に地理、歴史、理科等を学んだ。また、特に志願して英語を学んでいる。英語の教科書は原書で、米国の小学校で使用している「ナショナルリーダー」で、1886年版であった。高等小学校2年生の夏、日清

1) 高島亀太郎『七十七年の回顧』(渋柿図書刊行会、1960年)、22~62頁

2) 同、63~126頁

戦争が勃発。国中戦争で沸き返り、亀太郎も人一倍戦争に関心が強い、軍国少年であった³⁾

高等小学校時代の亀太郎は、学業優秀であり、且つ人望もあった。3年生の終わりの29年の2月に宇和島高等小学校の生徒で組織する養志会（修養団体、月に一度会員の親睦をはかり演説討論会を開催するなどの活動を行う）に入会し、その4月に幹事長となり、7月に再選、10月にもまた再選されている。だが、その年の暮れ、林巳之松校長ならびに養志会会長・柴田熊太郎（教員）らと意見が合わず、亀太郎は養志会を一時退会したが（そのため、養志会は衰退した）、30年1月28日、養志会の内部改革せんと再び入会した。そして、2月25日に、論敵であった同級生の山本俊晴を除名し、養志会を建て直している。亀太郎日記に「今日学校ニテ、養志会ヨリ山本俊晴ヲ除名セリ。初メ柴田先生等大イニ之ヲ拒ミシモ、余ノ意見遂ニ成リテ平素ノ望ノ一端ヲ遂ゲタリ。其結果、衆皆歡喜シテ彼ヲ嘲罵ス。之ニ於テ、入会者陸續トシテ至リ、大ニ養志会ヲ益セルナリ」（『高島亀太郎日記』明治30年2月25日、以下同様）とある。

また、亀太郎は、明治30年1月16日、近隣の小学校生徒を集めて、壮弁会なる団体を組織し、その幹事長にもなっている（壮弁会は、浄満寺にて、復習の夜学会や幻灯会、演説会等を行っていた）。

このように、亀太郎は高等小学校時代には大変人望があり、また、意思の強い、リーダーに成長していたことがわかる。

明治30年3月、亀太郎は高等小学校を首席で卒業し、この時も総代に選ばれ、自作の答辞を読んでいる。

さて、日記は亀太郎が高等小学校を卒業する年、明治30年1月1日から始まっている。13歳のときである。日記の書き出しは、「明治30年。丁酉ノ歳ナリ。吾将来立身上最必要ニシテ且最注意ヲ要スベキ年ナレバ、本年ヨリハ一層業務ヲ勉勵シ、他日完全ニシテ有為ノ者トナランコトヲ期セリ」（明治30年1月1日）で始まる。冒頭から亀太郎の早熟にして、志の高さが伺われる文章と

3) 同, 141~186頁

なっている。

2 実業家・亀太郎

亀太郎の父和三郎(1862年～1907年)は生糸商人。宇和島でも比較的大きな生糸商・生糸買入商であった。愛媛の製糸業は明治維新以降生成・勃興し、特に20年以降拡大・躍進していったが、なかでも、大洲地方と宇和島地方が中心であった。宇和島では、明治22年に小笠原長道(元士族・地主)が蒸気機関使用の製糸工場の最初工場・南予製糸株式会社(52釜の器械製糸。28年に新工場設立、96釜)を創設し、ついで、23年に赤松伊平(喜佐方出身、元呉服和洋反物商)が製糸業(足踏器械)を開始し(26年に事業を拡張し、50釜の器械製糸の新工場を設立)、また、同年竹場覚治も竹場製糸場(60釜、器械製糸)を始めると、次々と製糸業が勃興・発展していった⁴⁾

製糸業の興隆もあり、町の雰囲気も日清戦後には保守退嬰の風が刷新され、活動的となり、商売も活発となっていった。

製糸業の発展と共に生糸取引も発展していった。父和三郎は当初は小間物商が中心で、生糸商は副業であったが、宇和島の製糸業の発展に対応し、明治28年には生糸商専業に転じている⁵⁾

亀太郎は、日清戦後の明治30年3月に宇和島高等小学校を卒業し、すぐに父和三郎の手伝いをさせられた。和三郎は亀太郎を徹底的にこき使った。亀太郎は朝早くから起きて店の掃除、火鉢への火入れ、ランプの掃除、商売の用事の使い走り等、丁稚の役の外、家業の金銭出納方を任された。そして、父に随分口喧しく叱られた、いや、叱られ通しであった⁶⁾

家業の主要業務は、製糸家から仲買人を使って生糸を仕入れ、人を雇って捻造を行い、自ら括造をし、仲仕を雇い出荷することである。生糸を大枠より外

4) 拙稿「明治後期愛媛の農業構造(中)」(『松山大学論集』第3巻第4号, 1991年)

5) 高島亀太郎『前掲書』189頁

6) 同, 212頁

した儘のものを総といい、1総の重量は約9匁ないし9匁5分が標準で、2総を以て捻を行うのが捻造である（1捻が約18匁ないし19匁となる）。そして、この捻糸を30本集めて、6本を一列とし、5段に重ねて括締器で締め括るのが括造りである（1括は約540匁ないし570匁となる）。高島商店は普通15括を箱に詰め（これを1梱または1個という。約9貫弱）、出荷していた。

日記にはこの家業、手伝いのことが毎日書かれている。例えば、明治32年のこと。「午前八時頃ヨリ、父ト共ニ生糸壱個分ノ目調べ、上飾等ヲナシテ箱ニ入レ、乃、仲仕ヲ雇ヒ来リテ之ヲ捆ラシメ、薬師寺へ出荷スルコト例ノ如シ。終テ二十九銀行ヘコノ荷為替を取組ニ行キ、帰リテ計算ヲナス。午后再ビ二十九へ行ケリ。三時頃ヨリ、父ノ播、佐東、松崎等ヨリ生糸ヲ買入ルハヲ手伝ヒ、点燈ノ頃僅ニ終レリ。夜モ用務多シ」（明治32年7月4日）。「午前七時頃ヨリ、父ト生糸壱個ヲ作り終テ、仲仕ニ捆ラシメ、之ヲ瀬戸熊回漕店へ出ス。後二十九へ其荷為替取組ニ行クコト例ノ如シ。帰後商用多シ」（同、7月28日）等々。このような業務が毎日続いている。そして、亀太郎は明治32年12月末に、この年の自分の業務を次のように総括している。「本年中、予ノ日常ノ用務ハ、朝夕店及ランプ等ノ掃除ヲナシ、諸方へ使シ、又生糸、屑物ノ買入出荷ヲ手伝ヒ、銀行、回漕店へ行キ且金銭ノ出納、帳合一切ヲ掌ドリタリ。畢竟小僧ノ役ト計算方ノ役トヲ兼タルモノト云フベシ」（同、12月31日）。

高島商店が取引している主な製糸会社・製糸家は、赤松製糸（赤松伊平，宇和島町），竹場製糸（竹葉覚治，宇和島町），宇和島製糸会社（宇和島町富沢町），南予製糸株式会社（宇和島町丸之内），赤松製糸分工場（赤松晴雄，宇和島町），程野館製糸場（程野直之助，宇和島町，旧竹場製糸場を買収），末光製糸（末光寅市，宇和島町），富野製糸（富野亀太郎，丸穂村），牧野製糸（牧野伊四郎，丸穂村），佐々木製糸（佐々木高義，丸穂村），石丸製糸（石丸大次郎，丸穂村），丸城製糸（丸城久男，立間尻村），明治製糸合資会社（明治村），旭製糸（旭村），宮本製糸（宮本右衛門，吉田町），土居製糸（土居柝次郎，吉田町），青野製糸場（青野四郎八，吉田町），加賀山製糸（加賀山八次郎，吉田町），等である。

仲買人は播礪一、佐東由太郎、兵頭佐次郎、弓削栄三郎、米田元太郎、松崎民二郎、兵頭十二、肥和田善太郎、赤松甚吉、堀江寅一、吉田久治、保田八十八、保田富太郎、梶勇、土居柝次郎、有馬菊造等である。捻師としては、小松モト、枇杷田アイ等である。出荷の回漕店として、神森、薬師寺、瀬戸熊等である。取引銀行としては、第二十九銀行、宇和島銀行である。出荷先は京都が中心で、その他、福井、石川、愛知、博多、大分等へ出荷している。明治末には横浜へも出荷し、輸出に振り向けている。出荷先の商人では、京都では中井源左衛門商店（御池高倉）、外村商店（五辻通り）、服部佐一郎商店（一条通り）、武林洋行商店、大橋商店、福井では西野商会、加藤酢屋合名会社、加賀では小松加登半、富岡商店、博多では渡辺商店、横浜では西野商会、川合商会等である。

家業は生糸商が主であったが、父和三郎は明治31年以降、赤松（伊平）製糸の購繭主任となり、繭買入も行っている。31年の6月には、父和三郎は2週間程南宇和郡旭村近永（現広見町）に繭買入の出張に行き、亀太郎も従っている⁷⁾

また、後の明治35年の日記に、「午前、銀行へ行き、又赤松製糸場へ繭一籠ヲ持行き杯シ…」(明治35年5月23日)、「父、繭買入ノ目的ニテ近永へ赴キタレドモ、大洲程野ヨリ買子多数出張シテ、巢ノ内ノ分ヲモ悉皆予約シ居レリ、相場モ五三ヨリ五四ノ高直ナルヲ以テ即日引返セリ」(同、6月2日)とあり、また、翌36年にも、「午前九時、父ハ赤松製糸場ノ繭買入ノ為メ、田中頼蔵、吉條茂吉、住田米吉ト共ニ近永へ向ヒ出発シタリ」(明治36年5月29日)等々とあり、赤松製糸のための繭買入を続けていた。

高島商店は、生糸買入・出荷と繭買入の他に、明治34年7月より生糸の生産・製糸業にも乗り出している。製糸業については、亀太郎が担当し、足踏器械2台で、製糸を始めた。「七月初ヨリ九月中旬迄数名ノ工女ヲ雇ヒテ、日々下家ニテ汚繭ノ製糸ヲナサシメ」ている(明治34年9月21日)。工女は、湯本トメ、津村アキ、岩橋ツル、北町の武田、木村シゲヨを雇っている⁸⁾

7) 同、219頁

8) 『当坐帳 第2号』明治34年7月

翌35年にも製糸を続けた。「朝来、玉繭、汚繭ノ乾燥ヲナ」し(明治35年5月30日)、「此間、昼夜乾燥場ニアリテ、雇人菊地春吉ト共ニ玉繭凡六百貫及汚繭ノ乾燥ニ従事シ、二十四日ニ至リ漸ク終了…下家ニ於テハ工女三名ニテ、日々汚繭ノ製糸ヲナサシメ居レリ」(同、6月24日)。工女は、湯本トメ、佐々木ハル、岩橋ツルを雇い、35年の製糸高は5貫260匁となっている⁹⁾

さらに、翌明治36年5月には、足踏器械6台を導入し、製糸業を拡大した。「本日ヨリ踏器械六台ヲ以テ、下家ニテ製糸ヲ始」(明治36年5月26日)、「繭ノ買入、乾燥及製糸用ヲナ」し(同、6月2日)、6月15日に「始メテ新生糸壺個ヲ出荷」している。工女は、吉田タケ、矢野トラ、鎌田コト、清家フデ、浜田ヨシ、藤淵シナヨ、田中マサ、矢野シゲ、住田トリ、小松モト、岩城トク、徳久カネ、宮崎トク、佐々木ハル、矢野シゲ、平井ヨシエ、大橋ヨネ、島内カネ、田中テイ、鍵山マツ等を雇っている¹⁰⁾

だが、この年の製糸業は、繭の買いすぎ、繭の解舒不良等により大失敗であった。亀太郎は父和三郎にひどく叱責された。「汚繭、玉繭ノ買入各三百余貫、父、之ヲ見テ大ニ其買過ヲ叱責シ、一切買入ヲ中止ス」(同、6月9日)、「父、予ノ失策ヲ責ムルコト益々急、干燥場へ行キテハ乾燥ニ忙殺セラレ、製糸場ニ於テハ工女ニ解舒ノ不良ヲ訴ヘラレ、店ニ帰レバ絶ヘズ吃問ニ遇フ。労働ノ過度、心中ノ苦悶、殆堪フベカラズ」(同、6月10日)。このような惨憺たる結果、亀太郎は足踏製糸業を中止した。

亀太郎の父和三郎について触れておこう。和三郎は、堅実な人間だが、大変神経質な性格であり、しばしば神経疲労のため病気になっている。例えば、明治32年9月、南予運輸の汽船・御荘丸が事故で沈没した時、南予運輸の株を所有していた和三郎は、心痛のあまり腹痛を起こし、倒れている。日記に「父頻リニ株券ノ下落セルヲ憾ム。夜、父腹痛ス。乃、川岸端伊東ヨリ千金丹ヲ買ヒ来リ服スルコト二度、尚止マズ。遂ニ本町三丁目医師志賀守太郎氏ヲ聘シテ診

9) 同上

10) 『製糸帳』明治36年5月

察セシム。深く憂フルニ足ラズト、調剤ヲ得テ服用ス。後、半時間復腹痛ノ劇シキニ苦ミ、再志賀氏ノ来診ヲ乞フ。父皮下注射ヲ嫌ヒ、モルヒネ少量ヲ吞ミテ、痛漸止ム」(明治32年9月27日)とある。また、34年は恐慌の年で、生糸価格が暴落し、そのため、和三郎は心痛酷く、何度が倒れ、9月には腸カタルを患い、11月には腎臓及び心臓も患っている。「父ハ数日前ヨリ腎臓及心臓ニ病アリテ、身体水腫シ、呼吸困難ナリシモ、尚勉メテ生糸ノ仕立ヲナシ居タルガ、本日ハ午後ヨリ予手伝タレドモ、父疲労ニ堪ヘズトテ、遂ニ臥蓐シ、頗苦悶ノ態ナリキ。然ルニ、夜半熱及脳病併発シテ、十二時過兵頭医師ヲ聘スルニ至リ、二時頃迄頭ヲ冷シテ、漸眠ニ就キタル」(明治34年11月27日)。さらに、35年にも和三郎は倒れている。「午前一時頃、父、例ノ脳病ニテ逆上甚シキヲ以テ、医師兵頭氏ヲ迎へ、又追手通ノ氷屋ヲ起シテ、氷塊ヲ買来リテ、其頭ヲ冷ス杯種々手ヲ尽シタレバ、漸ク快方ニ向ヒタルヲ以テ、三時半再眠ニ就ク」(明治35年2月26日)。このように、和三郎の体はボロボロになっていたようだ。

亀太郎は、明治32年、16歳の時、次のように父を観察している。少し長いが引用しよう。「元来父ノ性質トシテ、凡テ事物ヲ為スニ、一意熱心、善ク精励スルト雖、只小心翼翼トシテ、苟モ危道ヲ踏マズ、所謂門外百里ノ明ナク、虎穴ニ入りテ虎子ヲ獲ルノ膽略ハ無キ人ナリ。故ニ商業ヲ営ム手堅キ一方ニシテ、相場少シク下落スレバ忽ニシテ元氣沮耗シ、瞬時モ耐持スルコト能ハズ。例ヘバ一時市場暫ク沈静ニシテ、送品ノ売行鈍滞シタル時ノ如キ、日夜頭痛シンシントシテ、徒ニ歎嗟ノ声ヲ発スルノミ。偏ニ売急ギノ傾アリ。相場稍恢復スルニ際シテ、皆売放シ悉シタルヲ以テ、後日大々暴騰ノ節ニハ亦一品ヲダニ止メザリシハ実ニ遺憾ニ堪ヘザル所ナリ。是ニ反シテ当地同業商人ニテモ、平素大膽、寧口無謀ニシテ、無責任的ノ売買ヲ敢テシタル輩ハ、本年ノ思惑実ニ大当リニテ、從テ買ヘバ從テ騰貴スルヲ以テ、益勢ヲ加ヘ野猪猛進ノ状態ニテ、一方ヨリ見越買ヲナシタルガ、生糸、屑物共漸々非常ニ昇進シテ、或品ニ至テハ以前ノ価格ノ三倍ニ登リタル物アル程ナレバ、真ニ一攫千金ノ暴利ヲ博シ、無一文ノ身ヨリ俄ニ多分ノ財産ヲ作レル者アリ。吾店ハ之ガ為、屑物ノ買入ヲ圧

倒セラレテ、止ムヲ得ズ、中途ヨリ手ヲ引カザルヲ得ザルニ至レリ。サレバ吾店ハ苦心惨憺ヲナス割合ニハ利益尠少ニシテ、十分腕ヲ振フニ足ルベキ経験ト資カト信用ト、而シテ熟練ナル仲買人ノ数名ヲ有シ乍ラ、空シク他人ノ暴利ヲ傍觀セザルベカラザルノ有様トナリキ。豈残念ノ至リニ非ズヤ。即、最初ヨリ本年ノ糸価ハ、例年ニ比シテ数層ノ上位ニ有ルヲ以テ、将来必ラズ下落スベシトナシテ、万事退嬰的ナリシモノ、事實ハ之ニ反シテ益々上騰シタルヲ以テ、終始其商機ヲ過リシニ基キ、経験一方ナルヲ以テ、本年ノ如キ異常ノ年ニ施スニ、尚平年ノ心ヲ以テシタルニ因ルナリ。而シテ父ハ曰ク。奇ハ遂ニ正ニ勝ツ能ハズ、正道ハ終局ノ勝ヲ制ス。故ニ商品ハ必投機ヲ避ケテ順売ニスベシ。商内ハ地場ニシテ確實ナルニ限ルト。」(明治32年12月31日)。

明治37年9月、父和三郎は、精神的苦勞が絶えず、遂に40歳の若さで亡くなった。今でいう過勞死であった。亀太郎が弱冠21歳のときであった。母、弟妹、8人の生活が亀太郎の肩に掛かってきた。長男として、家族を扶養する義務があり、責任がある。亀太郎は勤儉力行、必死で働き、節約し、家計を支えた。幸い、父の築いた得意先から生糸を持ち込む仲買人や製糸家はあとを立たず、家業の生糸取引は比較的順調に進んだ¹¹⁾

また、赤松製糸のための繭買入も、亀太郎が引き継いだ。父の死の翌38年のこと。「本日ヨリ赤松製糸場ノ繭買入ノタメ、吉田町へ出張スルコト、ナリ、朝、宅ノ用事ヲ方付ケ置キテ、九時頃出発。赤松ニテ金千円ヲ受取り、陸路吉田町へ赴キ、午后一時前、同町東小路安藤神社下隣ナル赤松製糸出張所、藤堂コト島内永次郎方ニ到着ス。予テノ手筈ニヨリ、土居柝次郎、土居宇吉ノ兩名ト共ニ、夕方迄繭ノ買入及買付品ノ受込ヲナシ、夜、計算ヲナシテ、十時頃予ハ同家ニ寝ヌ」(明治38年6月1日)。そして、6月14日まで2週間、吉田町で繭を買い、それを宇和島の赤松製糸に送っている。その後も、39年、40年、41年と赤松製糸の繭買入に従事している。

亀太郎は生糸商の外に、明治39年末から40年にかけて、タオル製造業にも

11) 高島亀太郎『前掲書』, 322~331頁

乗り出している。しかし、これは経営的には失敗し、短期間で止めている。また、明治45年には繭売買所も開設するが、これも長くは続かなかったようである。

3 独学、努力の人・亀太郎

亀太郎は、大変な秀才だったが、生糸商を営む父和三郎の反対により、中学に進学できなかった。その悔しさが日記に見られる。例えば、明治30年1月27日、中学に進学した友人に会った時のこと。「父ノ命ニ由リ元結掛肥和田方へ使ニ行ク。途次松本良之助等ニ遇ヘリ。此時余ノ胸中感勃起セリ。即、松本等ハ昨年三月迄同学級ナリシニ、既ニ南予分校ニ入りテ中学生トナリ居レリ。然ルニ、余ハ尚小学ニ在ルヲ以テ大ニ愧ヂタリ。而レドモ更ニ思フ。余、将来商業ヲ以テ大豪富者トナレバ、容易ク彼等ヲ圧服スルヲ得ベシト、之ヲ以テ自ラ制ス」(明治30年1月27日)。

だが、亀太郎の偉大さは、この悔しさをバネに常に勉勵努力していったことである。亀太郎は、小学校卒業後、父の家業を手伝う傍ら独学に励んでいる。

「種々商用ヲナシ、又日本外史ヲ読ム」(明治32年8月3日)、「午前ハ諸用ヲナシ、午後三時頃ヨリ四時頃迄『六ヶ月間英語卒業書』ヲ独習ス」(同、8月20日)、「終日店ニアリ。三時間、英語、簿記、漢文ヲ独修スルコト例ノ如シ」(同、10月22日)、「夜九時頃簿記ヲ独修ス。實用ノ学ノ実業家ニ極メテ必要ナルヲ思ヘドモ、昼間ハ之ヲ修ムルノ暇ナキヲ以テ、毎夜就眠前即十時ヨリ後二時間程ニ階ニテ独学ヲナスコト、ナシ、今夜ヨリ実行シテ英語ヲ独修シ、十二時頃寝ニ就キタリ」(明治34年4月10日)、「35年秋以来、夜間独修シ来リシ、ナシヨナル第五リーダー、一昨日ニテ全部ヲ読了シタルガ、其間夏季ハ修学ヲ休シモ前後五年ヲ費シタル訳ナリ」(明治40年1月19日)等々。

亀太郎が独学・読書した書物は、前掲の外、「大阪朝日」、「座右の銘」、「明治青年文壇夏ノ巻」、「中学世界」、「作詩自在」、「スウイントン氏英文典直譯」、「商業世界」、「作詩作文ノ友」、「通俗商業簿記」、「足利記」、「生理学教科書」、「那

波列翁一代記」,「十八史略」,「大阪新報」,「太陽」,「少年世界」,「小国民」,「滑稽新聞」,「中等教育算術教科書」,「福翁自伝」,「簿記学原論」,「吉田松陰」,「万国小歴史」,「普通学講義録」,「殺蛹乾繭論」,「西国立志編」,「実業家奇聞録」,「実業家人物評論」,「和文英訳例題詳解」,「英文難句注釈」などである(明治35年,19歳までの日記に記述された分)。

後年,亀太郎はこの独学時代を回顧している。「夜,人静まって後,覺えず暗涙に咽んだことも幾く度か。今に見て居れ!とは云うものの,忘れんとして忘れ難きは学校の夢である。自分より成績の劣っていた多くの級友が富家に生れたお陰で,親の理解のあったお陰で中学へ行き,やがて大学へも進んでいくのに,何とて自分はこのまま朽ち果てねばならないのか。天の一方を睨んで恨んで見ても仕方がない。よし独学で行こう。自分はどうしても学問を棄て得ない。叶わぬまでも,及ばぬまでも独りでやれるだけのことはやってみよう。人が百歩行くとき自分は十歩行ってもよいではないか。人が十里進んだあとに自分は一里を進んでよいではないか。停止するよりは一足ずつでも前進したい。昼は稼業に暇がなくとも,夜は書を読むことを許されなくとも,寝る時間を割くことが出来るではないか。夜の十時から一,二時間眠る時間を割いて勉強することを決心した。好きでやることだから少しも苦痛とは思わない」¹²⁾

向学心のある亀太郎は,明治41年から早稲田大学の通信教育を受けている。41年には中学程度の商業講義を,42年には保険,海運,鉄道,民法等の講義を,43年にはさらに進み,政治経済学科の講義を受けている。当時の講師陣として,浮田和民(政治原論),副島義一(帝国憲法),井上辰九郎(経済原論),平沼淑郎(近世商業史),山崎覚次郎(銀行論),工藤重義(会計論),飯島喬平(法学通論),牧野英一(刑法総論),松村吉則(簿記学),桑田熊蔵(社会政策),田中穂積(財政学),安倍磯雄(比較市政論),坪内雄蔵(修身講義)等々の名前が見える。坪内雄蔵はいうまでもなく,坪内逍遙である。

このように,亀太郎は家業の傍ら,勉学に励み,大変な刻苦勉励,努力の人

12) 同, 215~216頁

であったことが分かる。

4 実業青年会のこと

日清戦後の世のなかの変化でとくに注目すべきは青年の台頭であった¹³⁾。

明治34年1月3日、宇和島の青年実業家、河野円太郎（船具魚具商）、松井房太郎（荒物肥料商）の呼びかけにより、宇和島実業青年会が設立された（後、宇和島商工会・商工会議所になる）。亀太郎もこの呼びかけに応え、この会に当初から参加した。「三時頃松岡守次、兵頭楨三郎ト共ニ宇和島実業青年会ノ発会式ニ公会堂ヘ行ク。出席者紳士紳商ノ賛助員ヲ初メ、無慮百数十名ニシテ、先ヅ岩村藤一郎氏ヲ推シテ議長席ニ就カシメ、規則ヲ議シタルニ、薬師寺巖等後レ至リテ議論百出、宛ラ湧クガ如クナリシガ、一同撮影ノ後、会長、副会長ノ投票ヲ行ヒ、既ニシテ宴会ニ移リテ、佐渡文雄、森亘其他青年数氏ノ祝詞演説アリ」（明治34年1月3日）。実業青年会の初代会長は宇和島の財界の中心人物・堀部彦次郎（宇和島運輸会社頭取）を仰ぎ、副会長は岩村藤一郎（宇和島銀行員）が就任している。その後、同年4月1日の春季大会にて、会長は黒田孝太郎（本町1丁目、生蠟製造、石炭販売業）に、副会長は都築修蔵（本町4丁目、織物製造業、青年実業家）に代わっている。

亀太郎は、実業青年会で次第に頭角をあらわし、その月次会においてよく演説している。例えば、明治34年3月18日に、実業道德に関する演説を行い、その「要ハ現今ノ実業界ニ道德心欠乏ノ非難高キハ、主トシテ歴史的な原因ト投機心ニ因ルヲ以テ、之ヲ改良スルハ予輩実業青年ノ任務ニアリ」（明治34年3月18日）と述べている。投機を戒め、堅実をもって旨とする亀太郎の態度が伺われる。そして、4月15日の月次会にて、亀太郎は黒田会長により評議員の一員に指名されている。

亀太郎の最初の公開の場での演説は、34年10月9日、18歳のとき、実業青

13) 同, 185頁

年会主催の郡道問題大演説会においてである。「昼間店用ヲナシ、夜七時過、追手通融通坐ニ開カル、宇和島実業青年会の大演説会ニ臨ム。意外ノ好結果ニシテ、入場者場ニ満チ、左ノ順席ニテ交々演説ヲナシタリ。都築修蔵、大岡鶴吉、小川愛三郎、吉条茂吉、清家丑太郎、高島亀太郎、中臣風浪、黒田孝太郎。他ノ諸氏ハ孰モ目下ノ地方問題タル郡道改修ニ就キテ論ゼラレ、予独リハ『実業上ノ道德』トノ題ニテ述ベタルが、幸ニ静聴ヲ得テ十時前散会、帰路ニ就ク。劇場ニテ演説シタルハ今回ガ初メテナレトモ、思ヒシ程六ヶ敷キモノニテハナシ」(明治34年10月9日)。当時、治安警察法が制定されたばかりであり(明治33年3月制定)、未成年者および女子の政談演説会参加は禁止されていたのだが、参加だけでなく、演説をするなど、亀太郎ならびに宇和島実業青年会の勇気、革新的姿勢が伺われる。

明治35年3月6日、実業青年会春季大会があり、役員の変更が行われ、新会長に小笠原長道(地主、製糸家)が当選し(会長黒田孝太郎は一票差で次点)、副会長には都築修蔵が当選している。小笠原長道は反政友会・憲政本党系のメンバーであった。「会長小笠原長道氏ヲ始メ、佐々木高義、三好春樹諸氏ノ言動、恰モ青年会ヲ政党ノ機関視セルノ観アリ」(明治35年3月16日)とのこと。この小笠原会長の下、亀太郎は明治36年3月11日の春季大会で幹事(補欠)に選ばれている。

実業青年会はその機関誌として「実業青年」を明治35年9月から発行しているが(但し、明治36年5月で廃刊)、亀太郎は創刊号からずっとその編集発行に従事していた。

なお、実業青年会メンバーとして、上記の人物の外、日記には堀部健雄、村山半蔵、中平常太郎、吉条茂吉、渡辺寅太郎、小川愛三郎、池良一、等がよく出てくる。

5 政治家・亀太郎

亀太郎は政治に早くから関心を持ち、政治活動を行い、また自ら議員になっ

ている。明治44年1月、27歳で町会議員に初当選し、以後再選を重ねている。大正八年九月には国民党から県会議員に初当選し、以後再選を重ねる（後に、政友会に入る）。また、大正10年には市会議員になっている。そして、昭和12年には衆議院議員、さらに、14年には宇和島市長にもなっている。明治期の亀太郎の政治活動について見てみよう。

明治38年1月、亀太郎が21歳のとき、宇和島町の町会議員選挙があった。亀太郎は地縁の関係から裏町3丁目で酒屋を営み、政友会の町会議員である長滝嘉三郎の応援をしている。「夜ハ長滝嘉三郎氏ノ町会議員改撰候補運動ノ為メ事務所ナル玉置ヘ行き、又河原、枇和田ト共ニ有権者ノ宅ヲ廻レリ」（明治38年1月12日）。

亀太郎の政治的立場は、この頃まだそう明確でないが、政友会系ではなく、反政友会の憲政本党系（旧進歩党系）、愛媛進歩党系であった。明治40年、中央から政界革新会の島田三郎らの議員が宇和島にやってきた。亀太郎らはその演説会の世話をし、自らも演説している。24歳のときである。「夜、裏町劇場ニテ、村松恒一郎氏、黒田孝太郎氏等の政界革新演説会アリテ、予モ一場ノ演説ヲナス」（明治40年6月9日）。「政界革新会ノ名士島田三郎氏、前代議士細野次郎氏ノ一行遊説ノタメ来宇。午後一時ヨリ追手通融通坐ニ於テ政談演説会アリ、予而ノ打合ニヨリ、予等モ演説ヲナス筈ナルヲ以テ、正午頃都築君ト共ニ行キテ斡旋ス。来聴者多数ニシテ立錫ノ余地ナク、定刻開会。都築君マツ開会ノ辞ヲ述べ、次デ、予、『政界革新ハ時代ノ要求ナリ』ナル題ヲ以テ、約三十分間ノ演説ヲナシ好評ナリ。久松操君ノ『南与進歩同志会ガ島田三郎氏ノ一行ヲ迎フル主旨』ニ次デ、前代議士細野次郎氏ノ『吾人ノ本領』アリ。最後ニ島田三郎氏登壇、『憲政ノ危機』ト題シ、例ノ雄弁ヲ以テ一時間余ニ亘ル演説アリテ、大ニ政界ノ腐敗ト革新ノ必要ヲ述ベラレ、聴衆ヲ感動セシメタリ。カクテ午後五時閉会。帰宅後店用ヲナシ、夕刻ヨリ公会堂ニ於ケル島田氏一行ノ招待会ニ出席ス。来会者百余名ニシテ、予、開会ノ挨拶ヲナシ、島田氏の答辞アリ。酒間、同氏及ビ細野氏等の談話アリテ、十一時頃散会。」（同、7月14日）。この

ように、亀太郎は憲政擁護・護憲派であった。

同じ年の40年9月25日、第15回県会議員選挙があった。北宇和郡の定数は4名。政友会から長滝嘉三郎ら4名が、反政友会系の進歩党から小笠原長道ら2名が立候補し、戦われた。亀太郎は地縁の関係から長滝氏を、主義の関係から小笠原氏を応援している。日記に「過日来県会議員候補者トシテ政友会派ヨリ長滝嘉三郎氏、進歩派系ヨリ小笠原長道氏ヲ推薦シ、競争劇甚ナレバ、午前九時頃長滝氏ノ事務所袋町竹村へ行き、又十一時頃都築、中平ノ両君ト協議ノ上、小笠原氏ノ為メニ宇和島実業青年会有志及南予政界革新会ノ名ヲ以テ推薦状ヲ配布スルコト、シ、同氏ノ事務所ナル丸ノ内和霊社へ行キテ打合ヲナシ、帰後、予、其文案ヲ起草シテ直チニ印刷ニ付ス。正午過玉置氏ノ仏事ニ行キ、後、長滝氏ノ事務所ニアリ。夜、中平君ト共ニ印刷成リタル推薦状ヲ小笠原事務所へ持行く。元来、予ハ交誼上長滝氏ノ為メニ運動セザルヲ得ズト雖、聊義ニ依テ小笠原氏ヲ援ケシナリ」(同、9月21日)。「昨夜ノ推薦状ヲ今朝小笠原事務所ヨリ一般有権者へ配布セシメタレバ、長滝派ノ驚愕ト狼狽一方ナラズ、予ヲ召ビニ遣ハシテ青年会ノ内状ヲ聞ク等、笑止ニ堪ヘザルモノアリ。其依頼ニヨリテ渡辺寅太郎君共ニ二、三ノ家へ勧誘ニ行キ、後、都築、中平ト相会シテ破顔一笑セリ。奇策図ニ中リテ、青年会ノ人目ヲ聳動セシメンコト大ナリト云フベシ」(同、9月22日)とある。この県会議員選挙は政友会の圧勝で、政友会の長滝嘉三郎は二位で当選し、亀太郎らが推した進歩党の小笠原長道は、残念ながら次点で落選している。

また、同時期の9月30日に郡会議員選挙があった。亀太郎は、この郡会議員選挙に際して、自分達青年の代表として、実業青年会の都築修蔵を候補者に擁した。「夜、堀部健雄君方ニ実業青年会ノ人々ヲ会シ、郡会議員選出ノコトニ就キテ議スル所アリ。予ノ発言ニテ都築修蔵君ヲ候補者ニ推薦スルコトニ一決シ、直ニ其準備ニ着手ス」(同、9月25日)。そして、翌日以降、亀太郎は家業の傍ら精力的に選挙活動を行った。「朝、壺個ヲ出荷シテ後、直チニ都築氏選出事務所ナル袋町一丁目土佐屋旅館ニ行く。会員諸氏已ニ在リテ、共ニ運動ニ着手シ、

先づ青年会ノ名ヲ以テ宇和島町ノ有権者全部へ都築君ノ推薦状ヲ配リ、夜、予等各々手別ケシテ、町内各有権者有志家ノ戸々ニ就キテ、依頼シ廻レリ」(同、9月26日)。「生糸ノ買入ヲナシ、又都築事務所へ行ク。今日ハ大々の運動ヲナシ、宇和島町有志家有力者側ノ聯名ヲ以テ、都築君推薦ノ依頼状ヲ発スルコトヲ、予献策シ、二、三之ヲ危ブムモノアリシモ、断行スルコト、ナシタレバ、直ニ中平、三原、高岡、堀部ノ諸氏ト共ニ全町ノ名望家ヲ訪ヒテ推薦状ニ名ヲ列スルコトノ承諾ヲ乞ヒ、森忠極、竹場好明、小笠原長道、山村豊次郎ノ諸氏ヲ始メ、当町第一流ノ紳士二十名斗リノ承諾ヲ得タリ」(同、9月27日)。「選挙期日モ愈明日ニ迫リタレバ、各候補者ノ運動劇甚ヲ極メ元来地盤ノ固カラザル都築君ノ得点頗ル危機ヲ以テ運動者タル青年四十名必死ノ勇ヲ鼓シテ各方面ニ健闘シ、余モ高岡等数名ト共ニ、夜、堅新、横新及新町ノ方面へ入込ミテ、極力勸説ニ努ム」(同、9月29日)。そして、投票当日も必死になって有権者に働きかけている。「本日ハ郡会議員選挙ノ当日ニシテ、吾町ハ午前八時ヨリ午後参時迄ニ宇和島町役場ニテ投票ヲ行フ筈ナルヲ以テ、朝来都築事務所ノ出張所ヲ広小路中村ノ隣へ置キ、予等ハ各派ノ運動者ニ伍シテ町役場前ニ陣取り運動怠リナク、締切時間前ニハ自転車ヲ馳セテ有権者ノ出場ヲ促ス等奔走大ニ努ム。三時半ヨリ中原町長選挙長トシテ開票ヲ始メ、予等会場ニ詰掛ケテ結果如何ト待チタルガ、四時過ニ至テ、久松、黒田、都築ノ三氏当選、高島氏落選ト決定シタレバ、吾派ノ喜ビ一方ナラズ、万歳ヲ歡呼シテ事務所へ帰り、都築君ヲ擁シテ当選ヲ祝ス。一同歡喜ノ状譬フルニ物ナク、直チニ慰勞ノ宴ヲ開キテ、席上、予、当選状ヲ讀ミ、都築君ノ挨拶アリテ、大言壯語湧クガ如シ。実ニ今回ノコトハ青年会空前ノ名誉ニシテ、…真ニ近来ノ快事ト云フベシ」(同、9月30日)。そして、亀太郎は自分たち青年代表の都築当選の「喜ノ余リ、静坐スルニ忍ビズ、大ニ市中ヲ漫歩」している(同、9月30日)。

しかし、このような亀太郎の県会・郡会議員選挙における積極的な選挙活動は、実業青年会内部で批判が上がった。「過般青年会有志ノ名ヲ以テ、小笠原氏ノ選挙推薦状ヲ出シタル予等ノ行為ニ慚焉タラザル堀部、長山等ノ人々ヨリ、

此際実業青年会ヲ解散スルカ或ハ改称シテ、一部ノ先輩ノ悪感情ヲ解カントノ説」が出、大激論となっている(同、10月4日)。だが、亀太郎は「予、極力其理由ナキ所以ヲ述ベテ之ニ反対シ、…一部青年ノ無気力ヲ談」じている(同、10月4日)。

翌41年1月に宇和島町会議員選挙があった。この時も亀太郎らは妹ハルの夫で、中村紙店経営の中村惣八を青年代表として町会議員一級の補欠候補者に擁立している。「中村惣八君ト熟議ノ結果、同君ヲ町会議員一級補欠候補者ト、シ、予、直チニ奔走ノ上、同志黒田、村山、渡辺、都築、井上、高岡、増原、堀部ノ諸君ヲ三間楼ニ集メテ小宴ヲ催シ、明日ヨリ其運動ニ着手スルコト、ナス」(明治41年1月6日)。そして、連日有権者の家を回り、選挙運動を行い、中村を初当選させている。

さらに、亀太郎は国政選挙でも憲政本党のために選挙活動を行った。明治41年5月15日、第10回衆議院選挙が第一次西園寺公望内閣の下で行われた。愛媛県では、郡部で政友会から夏井保四郎・高山長幸・渡辺修・武市庫太・森肇の5名が、憲政本党から才賀藤吉・田坂初太郎・村松恒一郎の3名が立候補した。市部では政友・進歩両派の推薦で加藤恒忠が立候補した。亀太郎は宇和島出身の憲政本党の新人・村松恒一郎(政友会の山村豊次郎の兄)を推薦し、選挙運動を行った。「店用ヲナシ、午後四時ヨリ堅新町堀部ニ青年会幹部ノ人々ト会シテ、衆議院議員候補者村松恒一郎氏推薦ノコトヲ議ス」(同、5月2日)。そして、以後、村松当選のために奔走した。「衆議院議員候補者村松恒一郎氏選出事務所青年部ヲ本日ヨリ袋町土佐屋ニ置クニ就キ斡旋シ、夜、人々ト共ニ青年会会員ノ宅ヲ歴訪セリ」(同、5月6日)、「午后、屢々選挙事務所へ出入セリ。夜、都築君等数名ト共ニ有権者ノ宅ヲ勧誘ニ廻ル」(同、5月8日)、「午前五時頃、愛媛丸ニテ帰着セラル、村松恒一郎氏ヲ腕車ニテ樺崎へ出迎ニ行キ、同氏ニ尾シテ事務所へ帰ル。…夜、都築君ト共ニ又有権者ノ家々ヲ歴訪セリ」(同、5月9日)、「衆議院議員選挙ノ当日ナレバ、事務所及町役場付近ニアリテ、村松氏ノ選出運動ニ奔走ス」(同、5月15日)等々。そして、村松は2,557票の

得票をとり、最下位だったが、7位で初当選した¹⁴⁾

明治43年3月13日、犬養毅らの憲政本党、河野広中らの又新会等の各派は、政友会に対抗するために非政友合同を行い、立憲国民党を結成した。所属代議士は92名、愛媛県選出では才賀藤吉、村松恒一郎らが国民党に参加した。そして、従来憲政本党支部の役割を果たしていた愛媛進歩党が、実質上国民党の愛媛支部になった¹⁵⁾亀太郎も国民党に属した。

そして、亀太郎本人も明治44年1月、宇和島町の国民党の町会議員に立候補し、初当選している。27歳の時であった。以後、政治家亀太郎の本格的人生が始まる。

明治44年8月25日、第2次桂太郎が総辞職し、8月30日第2次西園寺公望内閣が成立し、この内閣の下で、45年5月15日、第11回衆議院選挙が実施された。郡部では政友会から渡辺修、武市庫太の両代議士の外、矢野荘三郎、成田栄信、青野岩平の5名が立候補し、国民党から才賀藤吉、村松恒一郎の両代議士の外、武内作平、清水隆徳、高橋秀臣の5名が立候補した。市部では政友会は八束可海（中立）を推薦、国民党は高野金重を推薦した。亀太郎は国民党の町議として、同党の代議士・村松恒一郎再選に向けて奔走した。「店用ヲナシ、又村松代議士候補者推薦ノ実業青年会事務所ヲ本日ヨリ春水旅館ニ設置スルニ就キ、同所へ行キテ種々斡旋ス」(明治45年、5月3日)。亀太郎は5月4日から10日まで商況不振の生糸の販売のため京都に行ったが、帰郷後すぐに選挙活動に専念した。「午前店用ヲナシ、又春水ナル村松選出青年会事務所へ行キ、午后モ人々ト共ニ新町方面有権者ノ戸毎訪問ニ廻レリ」(同、5月11日)、「午前九時ヨリ、巴誠二、上田元一、岩城兼雄ノ三君ト共ニ大浦へ選挙運動ニ行キ、雨ヲ冒シテ午後一時事務所ニ帰ル。後、村山、中平、中村等ト本町、裏町筋ノ勧誘ニ廻レリ」(同、5月12日)「村松候補ト共ニ個別訪問ヲナス」(同、5月14日)、「選挙当日ナレバ、町役場付近ニアリテ奔走ス」(同、5月15日)。選挙

14) 『愛媛県議会史』第2巻、1199頁

15) 同、1227頁

結果は、残念ながら、村松の得票は1,859票で、第8位、次点で落選した。なお、高橋秀臣も落選し、国民党は共倒れとなった。「本日開票の結果、村松恒一郎氏落選ス。遺憾ノ至リナリ」(同、5月17日)と。なお、この時村松は落選したものの、政友会の成田栄信が贈収賄で起訴され、議員失格となったため、大正元年12月に繰上当選し、議員に返り咲いている。

このように、亀太郎は若い頃から、町会から国会まで、すべての選挙で積極的且つ果敢に政治活動・選挙活動を行っていることが日記からわかる。

6 華宵について

日記には、弟の華宵(本名、幸吉、明治21年4月6日生まれ)に関する記述がそう多くはないが、いくつか出てくる。華宵は、明治35年3月、宇和島高等小学校を卒業し、その4月画家をめざして上阪、大阪伏見町の花鳥画家・平井直水に師事し、そして、翌36年4月には、京都市立美術工芸学校(日本画科)に入学している。しかし、37年9月、父和三郎の死により、退学、再び平井塾に戻っている。だが、平井塾では我慢できず、38年の4月には京都の画家・山田翠谷の学僕となり、5月には京都美術学校に再入学をしている。この間華宵は修業中の身であり、生活も苦しかったようである。日記には、華宵が兄の亀太郎に金を依頼し、また、亀太郎が華宵に学費を送っていることが記されている。「在阪幸吉ヨリ書状来ル。…京都山田翠谷氏方へ学僕トシテ住ミ込ミ傍、同氏并ニ他ノ名家ニ就キテ画学ヲ修練スルコト、ナシタル由ニテ、金拾円至急送ラレタキ旨申来ル。夜、是ニ対スル長文ノ書面ヲ認メ、明日金子ト共ニ送ル積ナリ」(明治38年4月13日)、「昨日、在京都幸吉ヨリ書状来リ、予テノ希望ナル美術学校再入学ノ運ビニ至ル模様ナルヲ以テ、六月分学費トシテ、今日金六円送レリ」(同、5月21日)、そして、毎月のように、「幸吉へ学費六円を送レリ」(同、6月26日)、「朝、幸吉へ学資ヲ送りナドシ…」(明治39年1月28日)等々。このように、父亡き後、修業中の華宵を経済的に支えたのが、亀太郎であった。

亀太郎は家族への愛情、思いやりが強く、責任感があり、また、誠実、堅実、着実、篤実な性格であったのに対し、弟の華宵の方は自己中心的で、わがまま、放縱怠惰であり、また、自己顕示欲の強い、打算的な性格であった。その旨の記述が日記にみられる。明治39年夏、宇和島で赤痢が発生し、亀太郎の家族にも患者が出て、大騒動になったときのこと。京都から帰省していた幸吉が弟妹の看護付添い人となったのだが、日記に「弟幸吉ハナヲ、実ノ付添トシテ避病舎へ行き居タレドモ、常ニ放縱怠惰ニシテ誠心看護慰籍ニ尽スノ意ナク、近来ハ患者ニ近キサエセザル様ナリテ、アマツサエ嬌慢日ニ募リ、同人ノ為メニ却テ看護婦ノ煩ヲ増ス程ナリシガ、尚近日妹退院ノ見込ナレバ、同時ニ帰り得ル様、其日迄ニテモ付添居ルベキ旨再三勸メ置キタレトモ、遂ニ嫌厭ニ堪ヘズシテ、本日出院帰宅セリ。帰後重ニ中村別荘等ニ起臥シ居レルガ、同人帰郷後ノ状態ヲ察スルニ、性格益々縦情放逸ニ変ジ、徒ラニ華奢虚飾ニノミ耽リテ、更ニ堅忍不拔ノ意志ナク、将来ノ傾向真ニ痛心ニ堪ヘザルモノアリ」(明治39年8月16日)とある。華宵の無責任で、怠惰な性格が伺われる。また、明治39年、華宵に親戚の高島久吾宅(浜高島)から、娘八重野への縁談・婿養子の話があったときのこと。亀太郎は華宵にその意思を尋ねている。「夜、中村別荘ニ幸吉を訪ヒテ、同人浜高島へ養子ニ行ク件ニ就テ其決心ヲ問フ。…予ハ依然好ム所ニアラザルモ、幸吉ハ進ンデ行キタキ意向ニテ、且同人ノ考ニテハ養子トナル上ハ、従来予ヨリ仕送リタルヨリハ一層多額ノ学資ヲ得、又美術学校ヲモ退学シテ、新ニ洋画ノ研究ニ従事シタキ由、此美術学校退学ニ就テモ、予大ニ反対シタレトモ肯セズ、結局、今後ノ方針ニ就テハ万事責任ヲ同人ニ帰シテ其意ノ儘ニナサシムル」(同、8月24日)。このように、華宵は愛情ではなく、仕送りが多いかどうかという金銭的打算で養子に行くことを決めたり、また、京都美術学校を中途退学して、洋画の道に行きたいなど、堅実な性格の亀太郎にとっては到底理解しがたく、まさにサジを投げたい気持ちだったことがわかる。画家とか芸術家をめざすものの中には、この種の性質の人物がいるとはよく聞くのであるが、華宵の場合も若い頃からその程度がかなりひどかったようである。

華宵はその後、明治39年9月に京都美術学校を中途退学し、関西美術院(浅井忠)に入り、洋画の道に進んでいる。しかし、それも長続きしなかった。同年12月に東京に出、翌40年には久留島武彦の「東京お伽俱樂部」に入団し、芝居活動に参加、熱中している。それが亀太郎にバレて、ついに亀太郎の堪忍袋の緒が切れ、酷く叱責されている。華宵は芝居を止めた後、40年9月に宇和島に帰っているが、自宅には近寄らず、浜高島にて、何することなく、ぶらぶらと日を送っている。年末の日記の回想に、「幸吉は東京ヨリ帰りテ浜高島ニアリ。同人ノ前途些ノ成算アルニアラズ」(明治40年12月31日)とある。

なお、婿養子の結末について、華宵は浜高島へ養子に行ったものの、不行状の結果、ついに離縁されている。「同家へ養子トナリ居レル弟幸吉の行跡ニモ不行届ノ廉ノミ多キヲ以テ、旁事情已ムヲ得ザルコト、ナリ、同家媒介者タル山本ノ伯母ヲ通ジテ離縁ノ申込アリタルヲ以テ、之ヲ諾スルコト、セリ。但シ幸吉ハ直チニ吾家へハ帰ラズ、暫ク中村ニ居ルコトナルベシ」(明治41年1月30日)。

浜高島から離縁され、親戚の中村家に居候していた華宵は、明治41年5月24日、亀太郎から20円の旅費を与えられ(実際は餞別)、宇和島を出ている。「弟幸吉ニ貳拾円ノ旅費ヲ与ヘテ京都へ趣カシム。同地ニテ自活ノ道ヲ立ツル筈ナリ」(同、5月24日)。いわば、事実上勘当扱いである。華宵は京都、大阪を転々とし、そして、9月には東京へ行き、労務者生活も体験している。「幸吉東京ニアリ、予トノ関係依然不和」(41年末日記、補遺)の状態である。その後も華宵の苦難は続く。華宵の絵が売れ、漸く自活できるようになるのは、周知のように、明治44年津村順天堂の中將湯の広告絵を描き、評判になってから以降のことである。

以上、明治末から昭和初期の、いわゆる大正デモクラシー期には、その華麗な絵で一世を風靡した華宵ですが、明治期には身から出た錆とはいえ、いろいろ苦勞もし、また、兄の亀太郎の心を大いに煩わせたことが日記からわかる。

7 クリスチャン・亀太郎

次に、クリスチャンとしての亀太郎について述べよう。宇和島のキリスト教の発展は亀太郎ぬきに考えられないと言われている。亀太郎のキリスト教への出会いは、明治36年10月、20歳のとき、商用で宇和島から吉田町へ船で行ったとき、船上での牧師との論争である。「午後1時樺崎出港ノ小蒸気船工営丸ニ搭ジテ吉田町ニ赴ク。船中基督教ノ伝導者二名ト大ニ神ノ有無ヲ論ジ、船港ニ着クニ及ブモ遂ニ決セズ」(明治36年10月26日)。この時には、神の存在を否定する論陣を張った亀太郎であるが、翌月には、「本年夏以来読ミ居タル『新約全書』、今日ニテ全部読了」し(同、11月17日)、そして、同月「夜、都築修蔵、升村英蔵ノ両君ト共ニ、中ノ町美以教会へ行キテ基督教演説ヲ聴」き(同、11月23日)、さらに、翌月にも「夜、本町三丁目基督教組合教会へ行キテ、教師ホワイト、神学博士ギューリキ両氏ノ演説ヲ聴」く(同、12月11日)など、急速にキリスト教に関心を示し、接近していつている。そして、明治37年9月の父和三郎が死も契機となったと思われるが、ますますキリスト教を信じるようになり、38年1月1日の年頭には「基督教ヲ信ジテヨリ、始メテ新年ヲ迎フ。願クバ栄光神ニアレ。アーメン」と記すまでになっている。そして、この年の4月23日、22歳のときに洗礼を受けている。そのときの喜びが日記にある。「本日は基督復活日ナレバ、朝大ニ祈ル所アリ。予テノ決心ニ依リ、午前九時半中之町美以教会へ行キ、日曜の礼拝アリシ後、牧師三戸吉太郎氏ニヨリテ洗礼ヲ授ケラル。…予今ヤ主ノ深キ愛ニヨリ、過去ノ罪ヨリ救ハレテ新生涯ニ入ル喜ビニ堪ヘザルト共ニ、今後ノ責任モ亦大ナリト云フベシ。…本日ハ一生涯中最記憶スベキ日ナリ」(明治38年4月23日)。その後、亀太郎は家業のかたわら、教会の活動に足繁く通っている。38年末の日記の最後には、「年ノ終リニ当リテ、徐ロニ本年中ノ経過ヲ顧ミルニ、吾心霊上ニ於テハ神ノ恩恵ヲ蒙ルコト特ニ深く、漸々基督教ノ信仰ヲ高ムルヲ得テ、四月ニハ洗礼ヲ受クルニ至レリ。弟幸吉モ大阪ニテ受洗シ、又吾庭ニ於テモ一同安穩ニ日ヲ送り、且母ヲ始メ、

僅ナガラモ信仰ニ近カントスルノ曙光ヲ認ムルニ至リシハ、吾微カナル祈リノ聴カレシカト思ハレテ誠ニ感謝ニ堪ヘザル所ナリ。商業上ニ於テハ、常ニ有力ナル多数ノ競争者アリシニ拘ラズ、吾ガ手腕ニ比シテハ望外ノ好成績ヲ得、固ヨリ生糸界波瀾甚シカリシ為メ、多分ノ利益ヲ得ルコト能ハザリシト雖、今日迄ハ別ニ従来ノ資力ヲ減ズルコトナク保持スルヲ得タルハ実ニ吾ガ力ニアラズシテ、神ノ御恵導に拠ルニ外ナラズト信ズ」(明治38年12月31日)とあるが、営業上の成功も神の導きだと理解するようにまでなっている。そして、教会でよく演説もし、聖書研究会にもよく通っている。

亀太郎の影響により、家族・親族の多くも洗礼を受け、さらに友人や実業青年会の仲間、製糸家仲間もまた洗礼を受けている。明治40年末に多数の洗礼があった。「組合教会ニテハ、今回集中伝道ニ就キ、森山、沢村、杉田ノ三牧師熱心ニ働キカケタル結果、当地未曾有ノ多数ナル洗礼志願者ヲ出シ、本日午前十時ヨリ裏町二丁目同教会ニ於テ、洗礼式ヲ行ハル、筈ナルヲ以テ、予モ出席ス。受礼者五十余名、…」(明治40年12月15日)。親族では、中村惣八・ハルの妹夫婦、友人では中平常太郎夫婦とその家族、製糸家では佐々木高義夫婦、程野直之助等。亀太郎の人格的影響の大きさを伺い知ることができる。

このように、亀太郎は熱心なクリスチャンになったのだが、しかし、亀太郎が誠実なのは、信仰の動揺についても記している点である。40年の回想に「予ガ信仰亦頗熱誠ヲ欠グ。之ヲ要スルに、肉体及心霊上共何等ノ光明ナシ。然レトモ絶対ニ失望スルニハ非ズ、奮テ復活ヲ期セン」(同、12月31日)とある。

8 文化人・亀太郎

亀太郎は忙しい中でも文化人であった。俳句、囲碁、謡曲、書道、川柳等をたしなみ、また芝居、活動写真等もよく見にいっている。とくに、俳句は句集を2冊出しており、優れた俳人でもある。宇和島では、都築修蔵ら実業青年会のメンバーたちが家業の傍ら熱心に句会を開いていた。亀太郎は明治38年以降、よく句会に出ている。「午前十時頃ヨリ都築君方ニテ談ジ、午後モ同君宅ニ

テ秋霜，暮天，曉花，知堂，孤雲，香灯庵，素石，太狂，無風，弦月ノ諸氏ト共ニ俳句ノ運坐ヲナシ，…」（明治38年2月5日），「都築ニテ長山，渡辺等ト共ニ談ジ，且俳句ヲ作ル」（同，2月6日），「夜，都築君方ニテ，吉田燕子君等ト俳句会ヲ催ス」（同，9月6日）等々。39年にも「夜，内山鉄杖君方ニテ催サル、俳句会ニ行キ，太田暮天，三原春風，都築修蔵，清家知堂，鉄杖ト共ニ運坐ヲナシ，…」（明治39年1月3日），「井上麻一君ノ催ニテ，午前八時頃ヨリ滑床会ノ連中，即チ同君ノ外，都築，加納，松井，三和，三原ノ諸子ト共ニ，巳原屋ノ屋形船ニ乗リテ船遊ヲナシ，舟ヲ九島，樺崎辺リニ浮ベテ，俳句ヲ作り，釣シ，又酒食ノ饗ヲ受ケ，…」（同，4月3日）等々。39年末から40年にかけて，亀太郎は生糸商の傍らタオル製造業にも乗り出し，ますます家業は多忙となっていたが，その中でもしばしば句会に参加している。「夜，堀端都築医院ニ於ケル俳句会に行ケリ」（40年1月3日），「夜，都築医院ニテ俳会ヲ催セリ」（同，2月17日），「滑床会員都築，村山等十名位ト宴ヲ催シ，句ヲ作り杯シ，…」（同，4月15日）等々。このように，亀太郎ならびに宇和島の実業家は余裕を持ち，豊かな精神生活を営み，その文化水準が高かったことが日記から伺い知ることができる。

なお，宇和島の俳句界は正岡子規の弟子で，宇和島出身の俳人松根東洋城（明治11年～昭和39年）の影響・指導するところが大きいようである。東洋城は，宇和島藩伊達家の家老の嫡流で，愛媛県尋常中学校（後の松山中学），東京の第一高等学校，東京帝大をへて京都帝大を明治38年に卒業後，宮内省に仕官していた。その東洋城が宇和島に帰郷のたびに，俳句の指導をしていた。「午前九時ヨリ，都築君ト共ニ帰省中ナル法学士松根東洋城氏ヲ堀端ノ邸ニ訪ヒ，他の俳友モ追々ニ集リ来レバ，…東洋城氏ノ俳談ヲ聴キ，同氏近来ノ自説ナル真ノ句及俳句趣味ナルモノ，単ニ俳句自身ニノミ止マラズ，広ク一般ノ事ニ及ボスベキコトナルコト等感ズル点多シ。後，運坐ヲ催シ，午後四時頃ヨリハ田村甲南氏ノ宅ニ移リテ，尚句作ヲ続ケ，夜九時ニ至テ散会セリ」（明治39年5月1日）。

おわりに 一人間・亀太郎—

亀太郎の結婚のことについても触れておこう。明治38年、22歳のとき、親戚の伯母より親戚筋の三好しか子との縁談が持ち込まれたが、「三好しか子ト結婚ノコトハ謝絶シタキ旨答ヘ置ケリ」（明治38年11月25日）と断っている。その後は結婚問題の記事がなく、3年後の41年3月、25歳のとき、「夜、予ノ求婚問題ニ就キ、中村君及村山君ヲ各二回訪問シテ談ズル所アリタリ」（明治41年3月18日）との記述が見られるので、この時亀太郎が進んで結婚を相手に申し込んだようである。そして、42年8月4日に宇和島町大字本町の小泉政治郎・ツルの二女、房（明治24年6月1日生まれ、18歳）と結婚している（この間の出会い、結婚等の状況は日記が散逸して無いため、残念ながら詳細は不明である）。亀太郎26歳であった。そして、明治44年2月7日には長女の倭文（シズ）が、大正3年4月23日には二女のスミが、大正7年12月4日には三女ヒデが誕生している。だが、不運なことに、二女は夭折、また、房さんは体が弱く、大正8年1月3日、27歳の若さで亡くなり、同時に三女も夭折している。

亀太郎は家族への愛情が強く、また、友人思い、他人への面倒見も大変よかった。日記を読むと家族への愛情がひしひしと伝わってくる。また、冠婚葬祭には必ず出席しており、他人への面倒見は並でなかった。交遊関係は広く、日記に著名な人物が次々に登場している。2,000~3,000人位はいるだろう。主な人物を列挙すると、村松恒一郎、山村豊次郎、堀部彦次郎、堀部俊介、石崎忠八、榎本源蔵、長滝嘉三郎、長山芳介、小笠原長道、黒田孝太郎、佐々木高義、赤松伊平、赤松晴雄、都築修蔵、堀部健雄、村山半蔵、中平常太郎、久松操、井上源一、中川鹿太郎、太宰孫九、清家吉次郎、佐々木長治、佐々木饒、久都直太郎、薬師神岩太郎、赤松桂、桂作蔵、中村惣八、純一、小西荘三郎、小西万四郎、小西左金吾、山本常一郎、桐田伊四郎、摂津静雄、河野駒次郎、柘田與三郎、山崎章一、伊勢金太郎、松本良之助等々。中央政治家では犬養毅、島田三郎、砂田重民、福沢桃助等である。

亀太郎はまた人格が高潔、誠実、律儀な人であった。例えば、小学校時代の友人で、且つ親類の山崎章一が市土木事業の収賄で捕まり、検挙されたとき、亀太郎は「山崎君ニ会ヒ、公職辞任ノコトヲ勸メ」ている(昭和7年2月8日)。潔癖な性格が伺われる。また、昭和17年のこと。宇和島市長退職の際、退職金4,000円にさらに1,000円をつけて、市に寄付している。「予ガ市長在職三年間ノ功劳ニ対シ、先般ノ市会ノ決議ニヨル退職慰労金四千元也ノ贈呈ヲ受ク。依テ直チニ市役所ヘ行キ、正午上田市長ト会見ノ上謝意ヲ表スルト共ニ改メテ金五千元也ヲ市ヘ寄付シ、公会堂建設資金トシテ採納積立テラレンコトヲ申出デ現金ヲ渡ス。公会堂建築ハ予ガ志望ニシテ在任中計画セシモ時局ノ関係上実現ニ至ラザリシヲ以テ其ノ建設ノ一助タラシメントスルモノナリ」(昭和17年11月4日)。政治家の鑑のような人であり、今日の政治家は亀太郎に大いに学ぶ必要があると思う。

高島亀太郎略歴

- 明治16年(1883)(0歳)2月6日 愛媛県北宇和郡宇和島町裡町4丁目に生まれる。父和三郎,母千代の長男。
- 21年(1888)(5歳)4月6日 弟幸吉(後の華宵)生まれる。
- 22年(1889)(6歳)6月 宇和島尋常小学校入学。
- 26年(1893)(10歳)3月 宇和島尋常小学校を首席で卒業。
- 4月 宇和島高等小学校入学。校内の養志会で活動。
- 28年(1895)(12歳) 父の家業が生糸商専業となる。
- 30年(1897)(14歳)3月 高等小学校を首席で卒業。後,すぐに家業を手伝う。
- 34年(1901)(18歳)1月3日 宇和島実業青年会発足と同時に入会。
- 7月 製糸業(足踏器械)を始める(36年に中止)。
- 36年(1903)(20歳)8月 徴兵検査。
- 37年(1904)(21歳)9月 父和三郎逝去(40歳)。亀太郎家督を相続。
- 38年(1905)(22歳)4月 キリスト教の洗礼を受ける。
- 41年(1908)(25歳) 早稲田大学の通信教育を受ける。
- 42年(1909)(26歳)3月 裡町4丁目区長代理者当選。
- 8月 小泉政治郎・ツルの娘,フサと結婚。
- 43年(1910)(27歳)12月 一級乙区会議員当選。
- 44年(1911)(28歳)1月 宇和島町会議員(2級)に初当選。
- 2月7日 長女倭文(シズ)誕生。
- 3月 裡町4丁目区長に当選。
- 大正3年(1914)(31歳)1月 宇和島町会議員(2級)に再選。
- 4月23日 二女スミ誕生(後,夭逝)。
- 12月 宇和島商工会常議員当選。
- 4年(1915)(32歳)6月 北宇和郡八幡村大字中間(のち宇和島市伊吹町)にて,製糸工場を建て,製糸業を始める(器

- 械製糸，50釜)。
- 6年(1917)(34歳) 製糸業の規模拡大，70釜とする。
- 8年(1919)(36歳) 1月 妻フサ(27歳)，つづいて三女ヒデ(大正7年12月4日生まれ，0歳)死亡。
- 9月 弟実(26歳)死亡。
- 9月 愛媛県会議員に初当選(国民党)。
- 10年(1921)(38歳) 製糸業の規模拡大，100釜となる。
- 12月 宇和島市会議員に初当選。
- 11年(1922)(39歳) 12月 弟義雄(25歳)死亡。
- 12年(1923)(40歳) 3月 工場の改造。大正式煮繭器，沈繰用繰糸器導入。
- 9月 愛媛県会議員に再選。
- 13年(1924)(41歳) 1月 清家十吉・イワの娘，清家セイ(27歳)と再婚。
- 15年(1926)(43歳) 10月 宇和島市会議員に再選。
- 昭和2年(1927)(44歳) 3月 愛媛県製糸同業組合第三区支部長就任。
- 9月 愛媛県会議員に再選。
- 10月 二女スミ死亡(13歳)
- 3年(1928)(45歳) 6月 新工場設立。千葉式煮繭機，半沈繰用繰糸器導入。
- 4年(1929)(46歳) 12月 愛媛県会副議長に当選。
- 5年(1930)(47歳) 10月 宇和島市会議員に再選。
- 7年(1932)(49歳) 3月 愛媛県製糸業組合長に当選。
- 11月 母チヨ逝去(67歳)。
- 8年(1933)(50歳) 6月 新工場設立。小岩井式多条繰糸機導入。
- 9年(1934)(51歳) 9月 宇和島市会議長に当選。
- 11年(1936)(53歳) 2月 宇和島商工会議所初代会頭に当選。
- 12年(1937)(54歳) 5月 衆議院議員に当選(政友会)。

- 14年(1939) (56歳) 6月 第8代宇和島市長に当選。宇和島商工会議所会頭を辞任。
- 16年(1941) (58歳) 7月 製糸業廃止。製糸工場を売り渡す。商工会議所議員辞職。
- 17年(1942) (59歳) 4月 宇和島市長を辞職。
5月 衆議院議員に再選。元製糸工場跡を宅地化。
- 18年(1943) (60歳) 山林の経営に着手。木造機帆船を購入し、海運業を開始。
12月 勲四等瑞宝章を受ける。
- 19年(1944) (61歳) 1月 宇和島木工産業株式会社設立。
- 20年(1945) (62歳) 12月 公職追放。
- 21年(1946) (63歳) 機船海運業を閉鎖。木工業に専念。
- 26年(1951) (68歳) 6月 公職追放免除。
- 29年(1954) (71歳) 宇和島市長立候補推薦を辞退し、甥の中村純一を支援。
趣味の俳句作りを再開し、同人雑誌「渋柿」に毎号掲載されるようになる。
- 30年(1955) (71歳) 6月 北海道を周遊する。
30年代前半は家業不振。
- 35年(1960) (77歳) 11月 『七十七年の回顧』出版。
- 36年(1961) (78歳) 6月 アメリカに旅行。
11月 沖縄に旅行。
- 37年(1962) (79歳) 4月 香港に旅行。
6月 ヨーロッパ旅行。
- 39年(1964) (81歳) 3月 自民党宇和島支部顧問。
7月 宇和島護国神社に胸像が建立される。
- 41年(1966) (83歳) 7月 弟華宵逝去。

- 43年(1968)(85歳) 木工工場と付近の貸家が焼失。
- 44年(1969)(86歳)11月 台湾旅行。
- 12月 右肩のヘルペスで入院。
- 45年(1970)(87歳)7月 直腸癌の摘出手術で入院。2ヵ月後退院。
- 47年(1972)(89歳)1月 宇和島市制50周年祝賀句碑完成。
- 秋晴の天守や市政五十周年 明皎々
勲三等旭日中章を受ける。
- 9月23日 逝去。従四位に叙せられる。宇和島法円寺に
葬られる。